

2025年5月

## 課題本 『52ヘルツのクジラたち』

町田 そのこ/著

中央公論新社

2020年

### ◆◆◆5月の読書会から

先月の振り返りから始まりました。先月の課題本『読書会という幸福』、幸福と反対の読書会という不幸とは？という視点で考えたとき、読書会のあり方、進め方など表面的なものではなく、対自分で考えてみる、という吉川先生の言葉が心に残りました。

今月の課題本は町田そのこの『52ヘルツのクジラたち』です。2021年本屋大賞受賞。ネグレクト、虐待、ヤングケアラーなどが作品の中に出てきます。読書会では感想や体験などいろいろな話が出ました。

(文責:森下)

### 2025年5月竹原読書会『52ヘルツのクジラたち』

(町田そのこ 著 中央公論新社 2020年)

吉川五百枝

「人って、なんて寂しいのだろう。幸せであっても、幸せでなくても」。

いくつもの寂しさが、あぶくのようにぷくぷくと浮いてくる。一つずつのあぶくは独立していて、それが絡み合いながら同じように水面に向かっていく。映画化されたものをテレビの画面で見ていると、しみじみと、寂しいなあという思いが満ちてきた。そして今回、課題本になった。あらためて、小説として読まなくちゃあ、と思う。

「52 ヘルツのクジラ」という高い音を出すクジラが居る事は、映画を経由した知識で知った。よく知られているシロナガスクジラは、10～39 ヘルツの音を出すそうで、52 ヘルツは高すぎるから殆どのクジラは呼応することがないという。水中音波探知機がその声を捉えたことはあっても、個体として姿を見つけたという報告はない。

中心人物は、「私」三島貴瑚。大分県の小さな海辺の町に東京から越してきて3週間が経つ。すぐに町のうわさになっているが、他人とかかわりなく生きてここまで来たのに、と「私」は思う。一人でそっと生きさせて欲しいのだ。

祖母からもらった家には海の見える縁側と庭があるし、10分も歩かないで海岸に出られる。人の存在に縛られることなく開けている海。「私」は、海鳥が舞う夏の海に足を投げ出して、堤防に座り、MP3プレーヤーのイヤホーンの声聞く。

「遠く深いところからの歌声」「泣いているような、呼びかけているような声。」「絶え間なく聞こえる声は深く響いて止まない」イヤホーンで聞いている声の描写だ。

これが、小説に出てくるクジラの声だ。そのクジラの声、映画ではナマの声として聞いた。しかし、その声を、どんな思いで聞いていたかは映画では伝わりにくい。文章では、〈声はいっしつかアンさんのものに代わり、アンさんが遠く近くなりながらわたしを呼んでいるような気がしてくる。ねえ、キナコ。〉と続く。

映画で聞いたあのクジラの声の響きを思い浮かべながら文章を読むと、原作と映画という二層構造の作品となり、「声」という、文字にしづらいものが源音として加わって何倍も豊かになる気がした。その声は、この小説全体の通奏低音となっていく。

イヤホンから聞こえる水中のクジラの声に〈アンさんのことを想像するだけで胸の奥があたたかくなる。〉と書く。「私」を残して先に逝ってしまったアンさんが、〈魂の番〉として「私」の中に蘇り、傷ついた後の空洞を埋めてくれているのだろう。映画の中で聞いたクジラの声は、私には、人という存在の孤独を承認する諦念の寂しさだと思えた。

この「私」を、「私」が思う。〈わたしって弱い人間だな、関わりあいたくないと思って引っ越しをしたのに温もりを求めている、寂しいと思ってしまう。周りに沢山の人がいるのだから孤独ではないのに。〉だが、〈たった一つの応えなければならぬモノをきずつけてしまった〉という東京での日々が、今も「私」を孤独にさせている。東京の名残りを慰めてくれるのは、イヤホンのクジラの声だけだった。

その「私」の前に、虐待の傷を持ち、無言となった男の子が現れる。

孤独の匂いのする少年、『ムシ』。そして「私」が付けた呼び名は、「52」。

母の育児放棄、祖父からも無視される少年に、「私」は、52ヘルツのクジラが感じさせるものと同質の寂しさを見た。少年は、「私」が過ごした幼い日と、それに続く日々の恐怖を蘇らせる。東京の生家で義父の折檻、娘に冷たく暴力で憂さを晴らす実母。5年前、難病の義父の介護を中心にする生活が始まった。逆上して死ぬと娘を罵り叩く母、それに耐えきれなくなった3年後、アンさんこと岡田安吾に出会った。家族から愛して欲しかったのに、逆に虐待をうけていた「私」は、悲鳴に近い内なる声を発していたに違いない。その声を受け止めてくれたアンさん。

〈愛を注ぎ注がれるような、たったひとりの魂の番いときっと出会える。〉というアンさんの言葉だけで生きていけるはずだった。

「私」に、キナコと別名をつけた〈神さまみたいな〉アンさん。〈人の苦しみとか哀しみに対してすごく優しい〉アンさん。「私」を救い出してくれたアンさんに助けられて、家から離れて生きていく事にした。

「キナコの幸せを祈る」と言うアンさんは、幼い頃から、男性の心を持った女性として生きていた。心に適応する男性として成長するために、肉体の改変を試みていたので、「私」は、男性としてのアンさんしか知らなかった。心身ともに「私」を愛したかたであろうアンさんは、女性として生きていくことを望む周囲に理解されぬまま自死を遂げた。肉体が男性か女性かを問題にもしないのが死だ。

東京での時間では、アンさんだけではなく、「私」を専有物のようにあつかう男性にうちのめされる修羅場もあった。「私」がアンさんの「しあわせになれる」という意味に気づいたとき、アンさんは、すでに先に逝ってしまった。「私」は、東京でアンさんを見失ったのだ。

全身でアンさんを受け止められなかった贖罪のように、「私」は大分に来た。

そして、自分の愛された記憶のない過去を受け入れ、自分が愛し尽くせなかったアンさんへの思いを贖うように少年に向かいあっている。

アンさんに引き合わせてくれた同級生の美晴が東京からその町にやってきた。「私」には、応えてくれる友がいた。そして、少年を取り巻く事態を、よりよい方向に進めようとする大人達

がいた。「私」は、ただ1頭のクジラではなく、「クジラたち」だと気づく。他のクジラの声に耳を傾けようとするしあわせな52ヘルツの「私」。

表紙カバーの折り返した袖の部分の絵は、左右とも耳の形をしている。そして5と2も見える。装画、装幀者の思い入れの熱が伝わって来た。

「人って、寂しいなあ」映画の画面からは、小説以上に寂しさがたち昇ってくる。

一気に完結させる映画の手法と、デルタ状になって種々に思考を拡散しながら収束に向かう小説の表現技法との違いを感じた。

寂しさに包まれながら、ふと思った。52ヘルツのクジラが、同類のクジラに出会ったら、それで慰められるのだろうか、と。慰められたら、寂しいということを忘れるのだろうか。人の寂しさという通奏低音を、どこかに隠しておけるのだろうか。

私は、誰かにであって、“あつ同類”と覚えることがあっても、何かを聞き出すことも伝える事も出来ない。ただ、荒波の中を、“同類”と一緒に泳ぐしかない。

## 『52ヘルツのクジラたち』を読んで

### ◆【 ZK 】

虐待されてきた人が虐待されている少年を気遣おうとする小説でした。しかし虐待されてきた人はほとんど我が子さえも虐待している。現実と離れた話だと思いつつも読んでいった。

虐待されている子供は誰にも相談できずに受け身になってしまっている。孤独のなかでも声をあげて人に聞いてもらうように励ましている。くじらの鳴き声の周波数で52ヘルツが本当の仲間にしか聞こえにくい声でこの小説の鍵となっている。

少年を52と呼んでいる。

人間は悲しみから抜け出せなくなると、絶望し、感情を遠くにおいて、なにも期待をしていない。

52のルーツがわかるにつれていろいろ家族の生きづらさがわかってくる。

日常にたわいのない会話をしているけど心の叫びをさりげなく、くみ取って察することが大切だと感じました。

ある格言に人の心を理解することを深い井戸の水をくむ事に例えてありましたが本当の心の奥を知るためには努力がいりすぐに簡単にはできないことが教訓でした。

人によっては遠慮深くて言わない人や、遠回しにしか話せない人がいるかもしれません。そのために最近の出来事とかどんな感情なのか話すことは必要だと感じました。

今家族のなかで虐待がまだまだたくさんあります。

とにかく親から逃げることは必要です。心の奥底を吐き出し暴力から逃げるように社会が助けるような施設の発展を願っています。

## ◆【 JM 】

虐待、ヤングケアラー、DV、トランスジェンダー・・・とてんこ盛りの内容である。ぎゅうぎゅう詰め幕の内弁当みたいで、ここまで詰め込まなくてもよかったのではと思ったが、考えてみると詰め込んであるから1つひとつの輪郭が丸くなっている。1つを切り出して突き詰めると、恐ろしくて目を背けたくなる。

また、虐待もDVもトランスジェンダーに対する無理解も、根源は他者を尊重しないということで、根は1つである。自分の価値観の押し付けや自分の無責任な行動が人を苦しめていることに気づきもしていない。或いは、気づいていても見ぬふりをしている。

子どもは親も家庭環境も選べない。壮絶な経験をしながら育った貴瑚だからこそ、声なき声を発している愛に気づくことができたのだろう。貴瑚に声が届いたことによって愛は救われる。貴瑚もまた、愛によって救われていると思う。

自分の生活を犠牲にしてまでも心配して来てくれた美春の存在、手を差しのべてくれる村中やその祖母たちなど、救いの状況もあり、ラストは明るい。現実の世界ではハッピーエンドなど少ないのだから、小説の世界ではハッピーエンドに浸りたい。だからこそ、アンさんには生きていてほしかった。私は自殺は容認できない。アンさんを取り巻く絶望的な状況は理解できるが、でもね、死んじゃあだめですよ。逃げていいから、生きてほしかった。自死は己れの救済で、他者には深い悲しみを残すと思うのだ。「もう2度と会えない」というのと「またいつかどこかで会えるかもしれない」というのは、天と地ほど違う。

誰にも届かない 52 ヘルツの声を発するクジラは孤独なクジラだ。私たちの周りにも孤独なクジラはいるかもしれない。孤独なクジラは下を向いているとは限らない。涙を流しているとは限らない。明るく笑っている人も密かに 52 ヘルツの声を発しているかもしれない。私はその声に気づくことができるだろうか。

## ◆【 T 】

52 ヘルツのクジラは、みんなの心の中にはいるのではないだろうか。キナコや愛、アンのように極限まではいかなくても、辛いことや不安な事、寂しさや孤独、口では言えない言葉を心に抱えている人はたくさんいると思う。そして、声にならない声で呟きながら魂の番を探し求めているのではないだろうか。

愛の母の琴美もそうだったと思った。高校生のとき子どもを産み、夫はあてに出来ず、小さな子を抱えてスーパーのレジ打ちをしながら必死で家計を支えていた時、彼女は助けを呼んでいたのではないだろうか、52 ヘルツの声を出していたのではないだろうか。彼女の声を誰かに見つけてもらうことは出来ず、心が折れてしまったのではないか。生まれた子に、「愛-いと」と名付けた時は、本当に愛しいという気持ちだったのだろうから。もちろん、だからといって息子への虐待は許すことはできないが。

魂の番になる人はどんな人なのだろう。初めはパートナーのことを言っているのかと思ったがそうではないようだ。

キナコの「魂の番」は、だれだろう。一人目は、義父の介護や母の無理強い疲れ果てさ

まよっていたキナコを見つけ、献身的に支えてくれた美晴、誰にも知らせず海の側に引っ越したキナコを探し出し元気になるまで側についてくれたのも彼女だった。

二人目はアン。キナコの様子がおかしいことに一番最初に気づき、家から離れる手助けをして、ずっとそばで彼女を支えてくれた。キナコの精神的支えになり優しく包み込んでくれた。自身が孤独を抱え苦しんでいるからこそキナコの気持ちがよく理解できたのだと思う。しかし、キナコの声はアンに届いたがアン声はキナコには届かなかった。アンもずっと声をあげていた。お互いもう一步踏み込んでいたら、言葉にしていたら、お互いが魂の番になれたのではないだろうか。

三人目は愛。親の愛情を得られず、虐待された辛い過去を持つ二人だからこそ互いの辛さや孤独な感情も分かり合えるだろう。愛もキナコもまだ自立できていないが、成長し自立していく中で、時には喧嘩をしたり、離れたりしながら、お互いがかけがえのないものになっていくように思う。

## ◆【 N2 】

読み始めると先が気になってついつい読んでしまう作品でした。キナコは、実母、義理の父、弟、との暮らしで辛酸を舐めていたのですが、幼なじみの美晴に偶然出会い、美晴の同僚のアンさんの助けで実家を出ることが出来ました。虐待、ヤングケアラー、親からの搾取、弄ばれた愛情、良き理解者の自死、自身の自殺未遂、(盛りだくさんの出来事が 26 歳のキナコに降りかかり、これは小説だとわかっていても、読んでいて溺れそうでした。)これらを経験して祖母の住んでいた大分県の海辺にたどり着き、一人暮らしを始めます。そこで実母から虐待され、祖父からも育児放棄され、親からは名前でもなくただ「ムシ」と呼ばれる声の出せない少年、愛と出会います。ムシは無視なのでしょう。愛と過ごす時間の中で、キナコは来し方と、キナコの 52 ヘルツを受け止めてくれたアンさんとの関わりに思いを馳せていきます。

誰もが 52 ヘルツで発信している時があると思いますが、誰にも気付いてもらえず、その内にうやむやに合理化したり、諦めてしまうこともあります。芸者の母を持つキナコの母も、父親から猫可愛がりされて育った愛の母琴美も、できの悪い生徒には冷たかったという祖父の品城も、それぞれ 52 ヘルツを発していたときがあったのでしょうか。しかしそれは誰にも届かず、その辛さが身近な者への虐待となってしまったのでしょうか。

自分の 52 ヘルツを理解してくれる魂の番に出会えた人は本当に幸せです。なかなか出会えなくても諦めずに鳴き続けていると、いつかどこかで誰かに伝わるがあると思いたいのです。聞こえない声を発する人だからこそ、他の人の聞こえない声に気づくのでしょう。愛を助けることでキナコも再生されていきました。アンさんもキナコを助けることで再生されるのではないかと思いましたが、理解されないまま自死を選びました。死後に女の子として埋葬され最後の最後まで母親に 52 ヘルツを聞いてもらえなかったアンさんの淋しさがとても心に残ります。

## ◆【KH】

真っ先に浮かんできたのは、福岡伸一さんの『動的平衡』I に紹介されていた、象とクジラの交信。南アフリカで群の仲間が死に絶え、たった1頭になった雌象が向かった先は、大海原が見渡せる崖の上。空気の振動と共に浮かび上がってきたのは1頭の雌クジラ。彼女らは、超低周波で話していたという。なんと壮大、心の震える光景だろう。

ちなみに、ピアノの一番左端の鍵盤、ラの音は 27.5Hz だそう。人が聞き取れる低音の周波数は20から600Hz だと言う。とすれば、クジラと象が交信していたおそらく10Hz ほどの音は、人間の耳には聴こえない。象は10から100Hz の範囲。中でも遠くにいる仲間との交信には、10Hz の低周波の声を使っているらしい。そのほうが遠くに伝わるそうだ。群れと群れで連絡を取り合うのは、年をとった雌の象だと言う。思慮深いであろう、雌象の言うことを聞かないのは、想像通り子どもの象と、雄。(発情期は例外らしい:笑)と言うのも、象ごといや、人ごととは思えなくて笑ってしまう。自分に聞こえる、見える、意識できる つまり認識できることは、本当に一握り。新しい何かを知る度に、できることも増えるのなら嬉しいのだが、そんなわけもない。

話を本筋に戻して。

愛に出会って間もなく、鯨の歌声をヘッドホンで聞かそうとする貴瑚。「鯨のメッセージは、他愛ないことであればいいなあとおもう。月がとても明るい夜だよ。こっちの海は綺麗で気持ちいいよ。君と久しぶりに会いたいよ。そんな会話が海の何処かで交わされて居たらいい。」それは、貴瑚がかつて慰められたであろう、鯨の歌声に託して語る切ない願い。でも、貴瑚が本当に愛に聞いて欲しかったのは、52Hz の鯨の声。

52Hz の声はクジラとしては超高周波で、他のクジラとの交信が難しい。誰にも届かない声で歌い続けている、世界で一番孤独なクジラ。助けを求める声を発し続けても受け止めてもらえず、やがて諦めた貴瑚。そして、同じく SOS を発し続けたのに、実母から壮絶な虐待を受けた末、文字通り言葉を失った愛。貴瑚と愛と鯨が重なる。話は前後するが、絶望のあまり声にならない声、いまにも消えてしまいそうな貴瑚と言う存在が発するメッセージ・緊急信号をキャッチできたのが、アンさんだった。

愛も、貴瑚と出会った時には、すでに助けてと言うメッセージを発すること自体を諦めて居た。声をあげて泣くことも。

のちに貴瑚が、美晴に語ったように、攻撃(虐待)されるより何より辛かったのは、必死に求めている“母”に振り向いてもらえなかったこと、自分を見てくれないことだったと。

お母さんに愛されたかった、と言う切なる思い。長く行き場のなかった思いが、初めて誰かに届いた。

その誰かとは、ほかでもないアンさんだ。「それは嬉しくて、でもやはり悲しかった。次の人生があると言うのなら、それなら次の人生は届けたい人に届けられるようになりたい。私の思いを受け止めてほしいひとに受け止められるようになりたい。」アンさんは、できるさと優しく言う。「第二の人生では、キナコは魂の番と出会うよ。」と。貴瑚の魂の番は、目の前にいるアンさんだったと、アンさんをなくしてから貴瑚は気づく。アンさんもまた、52Hz の声を上げる一頭の鯨だったのだ。52Hz の声を発するもの同志。声は届いても残る寂しさ。自分という存在を認められている、受け入れられているという実感を得られた時、心の傷が癒え、悲しみは無

くなるのだろうか。例えそうだとすると、自分という存在が孕んでいる寂しさ、悲しみは自分が引き受けて抱えて生きていくしかないのではないか。

草野心平の詩に出てくる蛙のように。「～さむいね。ああさむいね。～どこがこんなに切ないんだろうね。腹だろうかね～～」

小説として読んでいけば、貴瑚にとっての魂の番はアンさんでしょ、そして愛にとっての魂の番は貴瑚じゃない。と思ってしまうが、それは安易な発想ということで、この世に生を受けてからずっと、求めても求めても満たされない悲しみを抱いてきた人に、この人こそ私の魂の番だと言い切る勇気なんて、断言する勇気なんて、振り絞りたくても難しい。

二番目に言いたいことを言うと発言された参加者の一言。

ストレートに言いたいことをさらりと言える人は昔から、今も憧れの対象。でもストレートな言葉が、聞き手の心にストレートに届くには、忘れてはならない大切なことがあると気づいた。決して相手への思慮に欠ける言葉を発してはならないこと。思慮があるから心に届く。推測でものを言うのもダメだと思う。推し量るのではなく、慮れる人でありたい。そうすれば、直球の言葉を、格好良く投げかけることができるようになるのかな。。。多分私には無理っぽい。

抱えきれないほどの辛さを抱えてなんとか生きている人のそばにいて、ただ寄り添うことしかできないと悟ったとき、でも透明人間のようにただ、そこに居る事しかできないと感じられたそのとき、辛さを抱えた人は、自ら息をつぎ、生きようとするきっかけを得ているかもしれない。一番言いたいことはそっと脇に置いて、二番目を呟く、囁く。そしてそばに居る。その姿、心は美しいと切に思う。

この物語の舞台として。別府湾は観光色が強いので、寂れた漁村となると、もっと南の津久見あたりかなあとか、勝手に想像して居たら、なんと映画があるそう。これは、感想文を書いた後に見ないと、書けなくなると我慢。海辺の風景を楽しみに。

## ◆【 K子 】

鯨の生態に興味を持ち詳しく知りたいと思いました。52ヘルツの鯨は世界で一番孤独な鯨だそうです。存在は知られていますが発見はされていないそうです。作品の登場人物がこのクジラに例えられています。「たち」なのです。世の中に多く居ることでしょう。心が温かくなる人達・背筋が寒くなる人たちと二分化されています。

ホット組＝主人公キナコ(貴湖)の友人晴美・修繕業者の村中他…メインはキナコの心の拠所アンさん(彼は52ヘルツ)

背筋組＝愛(いとし・男の子)の母親・祖父・貴湖の愛した主税…母親  
題材が天こ盛り(虐待・性同一障害・貧困等々)今の世の中でアル、アル素材ですが…内容に引き込まれ、涙がポロッ！人間なぜこんなにも我が子にひどい仕打ちが出来るのか？(怒髪天)

内容は大分(大都会ではないのがよいと思いました)題名とうまく組みあわさってとても考えさせられました。本のカバーにも仕掛けがあります。探すのもお楽しみ…映画にもなっています。「読んでから観るか? 観てから読むか?」おまかせ…

## ◆【望月悦子】

今回の課題本から、題目は忘れてしまったが昔視聴したNHKのドキュメンタリーを思い出した。

その内容は、「ある乳児院の子どもたちが、夜寝ている時眠りながら無意識にベッド横の壁に一斉に頭を打ち付ける。一人一人投打の音や様子は様々だがその場面に驚愕してしまった。当時は愛情不足によるストレスが溜まった姿だと思っていた。そのころから乳児院の組織運営に変化が見られ、数人の子どもに決められた職員が担当することで、より母親を感じることができるようになった。ある子は抱っこされたことがないからか抱っこの方法から教えられていた。その子が担当の職員と2人で歯科治療に出かけた時、恐怖におびえて初めて職員に抱きつくことができ、治療後安心した笑顔で病院を後にしていた。現在の乳児院は、職員が大勢の子ども世話をする施設から、一人一人の親の代理をする施設へと変化している」今思えばあの乳児たちは『52ヘルツのクジラたち』だったのだと思えた。

この課題本から次の2か所が作者の主張したい内容だと思った。

その1「世界中にいる52ヘルツのクジラたちに向かって、どうか、その声が誰かに届きますように。優しく受け止めてもらえるように。(P260)」

生まれたての赤ちゃんが見せる笑顔のような表情のことを「新生児微笑」と言うが、これは単に筋肉が動いただけなのに、周りの大人たちは笑顔のような表情をうけとめ喜び反応を示している。生後1~2ヶ月ごろには人の声や顔が分かって反応し微笑みを見せるようになることを「社会的微笑」というが、親を始め周囲の大人たちに抱っこされたり、ほおずりされたりして優しく受けとめてもらって育っていく。どの赤ちゃんも言語能力だけでなく、コミュニケーション能力をも備えて誕生しているのに、かかわってもらえずに時を過ごしたためにその能力が育たないケースもある。愛がそのひとりである。

その2「彼女はとても辛い過去を背負っています。愛された記憶が無さすぎます。彼女には誰かに心身ともに包まれ満たされたというかけがえのない記憶があるのです。そうしなければ彼女の心の海はいつまで経っても豊かにならない(P201)」

ほとんどの赤ちゃんは待ち望まれてこの世に生を受けている。自分の意志がまだ確立されていないのにしぐさなどの可愛らしさを無条件に受け入れ、受け止めてもらって愛着関係が築かれていく。この基本的信頼関係によって人を愛すること・信じる事が構築されてコミュニケーションが深まり育てられていく。そんな中このケースのように想像を絶する虐待、ネグレクトを受けて育っている子どもたちも多くいる。悲しいかな「育つ」のはよい方にも悪い方でも育つ。課題本では、その姿を具体的に表現しているので一層生々しさを感じる。

虐待を受けた人は、自分は絶対こんな虐待はしないと思っけていても、そういう育ちしかして

いないため、多くの人は同じ体験をしてしまう。この課題本では、主人公は自分が受けた虐待の連鎖反応を断ち切り、自分と同じ境遇の一人の子どもをほっておいてはいけないという気持ちが持てたこと。最後まで諦めずに「親権」を得るための努力をしていることなどなど。やっと人間らしく基本的信頼関係をいろんな人の影響を受けて構築できるように成長している。主人公のように成長していく人も多くいるはずである。ただ残念だったことは、なぜ主人公に一番影響力のあった人がレズビアンだったのか。これはこれで別の問題が考えられ深く掘り下げると多様なことが考えられる。盛り多くのことを取り込まないで、著者が主張したいことをストレートにまとめる方がすっきりすると思った。

闇に葬られている多くの社会情勢・声に出せない幼い子どもたちの思いを「52ヘルツのクジラ」として取り上げ、みんなで考える機会を与える著者にあっばれである。

## ◆ 【 MM 】

母から暴力やネグレクトの虐待を受け、病気の義父の介護を押し付けられた貴胡。母親から舌に煙草を押し付けられ、食事は満足に与えられず、ムシと呼ばれている少年、愛(いとし)=52。貴胡のいちばんの理解者だったアン=岡田安吾(男性として描かれていたが彼の死後、トランスジェンダーだったと知る。本名は岡田杏子)。貴胡の会社の専務であり恋人となった新名主税(付き合っている間に主税には同棲している婚約者がおり、それが貴胡の知るところとなるが婚約者とは予定通り結婚し貴胡との関係も続けると言う。主税の親も愛人がおり愛人が経営する店に主税は貴胡を連れていったりする)。

52ヘルツのクジラとは、「世界で一番孤独だと言われるクジラ。その声は確かに響いているのに受け止める仲間はどこにもいない。存在は発見されているけれど、実際の姿は今も確認されていない」。貴胡、愛、アンはそれぞれ52ヘルツのクジラか。だから声にならない声(声を発しているけれど普通の人にはわかってもらえない)を聞くことができたのか。貴胡を救ってくれたのはアン。愛を救ってくれたのは貴胡。アンを救ったのは誰か。救ってもらえなかったから自死したのか？

読書会に参加する前に思ったのは物語には感情が動かされたが魂の番には共感できない。絶対的な存在は私にとってはありえない。特別な人とは言えるけれど二人で一人、みたいな感覚をもてる人はいるのかなあ、いないなあ。夫婦としてのペアはいるけれども、魂の番…。そんなに絶対的な相手っているのだろうか。必要なのかしら。アンの自死についても、話の中で死ぬ必要があるのか、貴胡が苦しむだけでは？と引っかかっていた。

今月の読書会でこれらの私が納得していなかったことを理解する言葉に出会えた。吉川先生が言われた「亡くなって記憶としてその人のものになる」。アンが生きている間は貴胡は主税が徐々に変わって行って束縛され、暴力を振るわれても主税と別れてまた孤独になることを選べなかった。アンが主税を調べると婚約者がおり、貴胡の想いに誠実に向き合っていない現実を知る。貴胡に「主税は貴胡を悲しませるかもしれない」と言っても「いい人よ」、と返され、主税の周囲に告発文を送っても主税は貴胡だけを見ることをしない。反対に主税はアンの母親にアンがトランスジェンダーであることを暴露し、貴胡がアンのストーカー行為に困っ

ていると捏造されて故郷に帰ることになってしまう。どうやって貴胡と向き合うことができるか、考えた末のあの行為だったのだろう。今までは貴胡の幸せを願っている動いてきたが、その究極が命を絶って貴胡の記憶の中で生きる事だった。貴胡はアンが死んでからことあるごとにアンさんならどうするかな、どう言うかなと心の中のアンに問いかける。アンに主税ほどの強引さや強さがあればよかったがそれがなぜできなかったのを知ったのは死後。アンの想いを知るにつれ何とも言えない気持ちになる。アンが貴胡を再び救おうとする想いと同じくらいアンも救われたかったのかと。いろんなすれ違い、掛け違いに歯ざしりする。

読書会では本の中にあつた助けを必要とする子どもは作り話だけではない、今だって実際に身近にいるのだ、ということを知った。子どもたちに対する姿勢、迷いなどを聞いて涙が出た。見てくれている人はいる。一人じゃない。関わっている人はそれぞれの思い、方法で子どもと向き合っている。